

土田麦僊の関眞次郎あて葉書

横山 秀樹

一、土田麦僊あて書簡について

土田麦僊（一八八七～一九三六）は、近代日本画を代表する画家で、京都画壇の一人として活躍した。優美さと緊張感にあふれる数多くの名作を残し、内在した美しさを秘めた気品ある作品群は、現在においても燦然たる輝きを放っている。

麦僊は四十九歳という短い生涯の間、勢力的に作品を描くとともに多くの書簡を残している。書簡は妻の千代に宛てたものや後援者に宛てたものなどがあり、制作途中の暇を惜しんで書かれたものも多くある。麦僊の書簡の特色として、日常的なことは当然ながら、制作中の作品についての考え方や、絵画に関する芸術論時代の状況など多種にわたって書きとめられていることである。これを読み解くことで、麦僊芸術の真価により肉薄することが出来るとともに、近代日本画がどのような状況のもとで成立してきたかを知ることが出来る、一級の資料となっている。

これまでも、多くの研究者が麦僊の書簡について読み下しをおこない、研究成果を発表してきている。書簡を複合的に研究することにより、麦僊作品に対する認識が深まりをみせ、作品研究も一段の充実がなされてきている。

これまでに麦僊の書簡を紹介してきた文献には、

山南会編『土田麦僊』大原孫三郎、昭和十七年

金井徳子「土田麦僊の滞欧書簡」『比較文化』第三号、東京女子大学紀要、昭和三十二年（以後）「土田麦僊の滞欧書簡」と記載）

金井徳子「土田麦僊のイタリア通信」『比較文化』第四号、東京女子大学紀要、昭和三十三年（以後）「土田麦僊のイタリア通信」と記載）

金井徳子「麦僊の滞欧生活とそれ以後」『比較文化』第五号、東京女子大学紀要、昭和三十五年（以後）「麦僊の滞欧生活とそれ

以後」と記載）

田中皓一「土田麦僊研究（二）から（十八）」『萌春』一七七号、一九五号、昭和四十四年、昭和四十六年（以後）「土田麦僊研究（二）から（十八）」と記載）

加藤傳一「土田麦僊の書簡（二）」『新潟大学教養学部紀要』第二十五巻第二号、昭和五十九年（以後）「土田麦僊の書簡（二）」と記載）

加藤傳一「土田麦僊の書簡（二）」『新潟大学教養学部紀要』第二十六巻第一号、昭和五十九年（以後）「土田麦僊の書簡（二）」と記載）

田中日佐夫編「土田麦僊の野村一志あて書簡」『美学美術史論集』第四輯、成城大学大学院文学研究室、昭和五十九年（以後）「野村一志あて書簡」と記載）

田中日佐夫編「土田麦僊のヨーロッパからの書簡」『美学美術史論集』第六輯、成城大学大学院文学研究室、昭和六十二年（以後）「ヨーロッパからの書簡（続編）」と記載）

田中日佐夫編「土田麦僊のヨーロッパからの書簡（続編）」『美学美術史論集』第六輯、成城大学大学院文学研究室、昭和六十二年（以後）「ヨーロッパからの書簡」と記載）

横山秀樹「土田麦僊の初期作品と青年期について」『新潟県美術博物館紀要』第一号、昭和六十二年（以後）「初期作品と青年期について」と記載）

柏木加代子「麦僊とパリ」『かきつばた 土田麦僊の愛と芸術』大阪大学出版会、平成十五年（以後）「麦僊とパリ」と記載）

計良勝範・上田文「土田麦僊 藍原五三郎宛書翰」『鳩村研究会』平成十五年（以後）「藍原五三郎宛書翰」と記載）

などが刊行されている。

書簡について最初に公にされようとしたのは、麦僊の塾であった山南会が麦僊の亡くなった後、遺作集として昭和十七年に編集した『土田麦僊』（註一）であった。この本には書簡が八十五点掲載されているが、刊行直前に大原孫三郎の意見により公にならない

かったものである。全冊廃棄処分されたことになっているが、現在でもたまに古本屋に出ることがある。『土田麦僊』の本文中には、大原孫三郎氏に宛てた書簡は紹介されていないが、晩年の後援者であった大原氏に宛てた書簡類が公にされることがあれば、密展や七絃会への出品作について、制作における考えなどがより一層明らかになると思われる。

『土田麦僊』は刊行されなかったもので、麦僊の書簡について最初に体系的に発表したのは、金井徳子氏である。東京女子大学の紀要『比較文化』のなかで発表された論文は、三回に分けられて掲載された。多くの書簡類をもとに、麦僊研究として緻密で系統だった内容であり、ヨーロッパから留守宅の千代夫人に宛てた書簡が初めて公になったものもあった。また他の書簡類を交え麦僊の生涯にもふれながら紹介し、麦僊の芸術観を検証した、優れた論考である。これ以降、麦僊の作品について論ずるときには、書簡類による検証が大きな比重を占めるようになってきている。

田中日佐夫氏が編集・解説した「土田麦僊の野村一志あて書簡」「土田麦僊のヨーロッパからの書簡」「土田麦僊のヨーロッパからの書簡（続編）」の三冊は質・量ともすぐれたものであった。この三冊の『美術美学史論集』は、青年時代からの野村一志氏との交流による書簡（明治四十四年から昭和十一年まで）、麦僊が千代夫人に宛てた、大正十年十一月から大正十二年三月までに至る「ヨーロッパからの書簡」「続編」ではヨーロッパからのハガキ類を中心に収録されており、この資料をみるだけでも麦僊の筆まめさがよくわかる。

田中皓一氏は『萌春』に十八回連続で掲載した、「土田麦僊研究（一）」から（十八）」の中で麦僊の論考を行った。書簡やその他の資料を基に緻密な考証を行っているが、村松梢風の「本朝画人伝」的な趣が見られるところがあり、力作であるが一般的にあまり知られていない。

「麦僊とパリ」の中で、柏木加代子氏は欧州留学時代にフランスで知り合った、アンリエット・コルデイエから麦僊に宛てた書簡

を紹介し、滞欧時に麦僊がどのような生活をおくっていたのか垣間見ている。アンリエットの書簡には甘い想いが綴られているが、麦僊がフランス滞在中に制作した作品については触れられていない。柏木氏によると、麦僊は帰国後友人の画家にアンリエットから送られた書簡を預けていたという。

計良勝範氏と上田文氏による「土田麦僊 藍原五三郎宛書翰」は、明治三十七年から昭和三年までの十通を紹介している。藍原五三郎は麦僊が生まれ育った新潟県佐渡郡新穂村（現佐渡市）にある、新穂尋常小学校時代に教えを受けた恩師で、京都に上京してから藍原氏が亡くなるまでに書き送った書簡である。また計良氏によると、新穂高等小学校からの友人であった高野詢二氏に宛てた未発表の書簡が二十七通残されている。藍原先生に宛てた書簡は明治時代のもものが五通あり、麦僊が上京して栖鳳塾に入り、竹杖会で勉強している頃の様子が見える内容のものである。

拙論の「土田麦僊の初期作品と青年期について」の中では、麦僊が法衣商であった峯芳吉氏を頼って京都へ上京したあと、峯氏に宛てた書簡を紹介した。この書簡は現在に新潟県立近代美術館・万代島美術館の所蔵となっている。

二、「関貞次郎あて書簡」について

加藤信一氏は「土田麦僊の書簡（一）」、「土田麦僊の書簡（二）」を新潟大学教養学部紀要に発表し、合計五十五通の書簡を紹介している。ここで紹介された書簡は、新潟県加茂町（現加茂市）で当時大規模に機械織物業を行っていた、関貞次郎氏に宛てたものである。関氏は美術収集家としても知られ、古美術、書画、道具類など多方面にわたり蒐集していた。

昭和四年（一九二九）、ニューヨークのウォール街で起きた株価の大暴落による世界大恐慌は、翌五年には日本も巻き込み全国で大恐慌に陥り、農村部でも生糸や農産物の大暴落など経済的な破綻が起こった。関氏の事業も不況に巻き込まれて経営不振となり、



関貞次郎あて書簡

昭和九年には美術品などを整理して入札にかけざるを得ない状況に陥った。

加藤氏は、関真次郎氏宛ての書簡五十五通を紹介したが、関家にはこの他十四通の葉書が残されていた。そのうち十通が大正十年（一九二一）から大正十一年にかけて書かれたものであり、麦僊がヨーロッパ遊学を行っていた時期のものである。残りの四通は昭和四年（一九二九）から昭和十年（一九三五）までに出了された絵葉書で、帝展への出品作について記載されている。

関氏宛ての書簡類は、明治四十四（一九一一）年十一月十六日に出了されたものが最初であり、最後は昭和十（一九三五）年六月十五日だったと思われる。この間、『関家蔵品入札』によれば、関氏は麦僊の作品を多く所蔵しているが、麦僊の幹旋によって購入したと考えられる竹内栖鳳の作品が多く含まれており、その数は麦僊の作品数をはるかに凌いでいる。書簡には小野竹喬作品の幹旋依頼、黒田重太郎の新潟での画会開催の打診なども書かれており、関氏と麦僊との関係を知ることの出来る資料となっている。書簡類は切手収集のために剥がされているものが多く、一部には差し出し年月日が判読不能のものもあるが、野村一志宛の書簡を参考にすることによって差出年月日を類推することは出来る。

関真次郎氏にあてた土田麦僊書簡類は、ひ孫の関岳夫氏が所蔵していたが、平成七年（一九九五）に新潟県立近代美術館が購入し、現在は新潟県立近代美術館・万代島美術館の所蔵となっている。購入したときには書簡が五十三通、葉書が十四通となっており、加藤氏が発表したときより書簡が二通少なくなっている状態であった。加藤氏が解説した書簡については後日改めて論考したいと考えているが、この稿では今まで未発表であった葉書の十四通について読み下しを行い、内容について紹介していきたい。

三、関真次郎あて葉書

① 消印不明 1921・10・25
大日本新潟懸加茂町 関真次郎様

香港にて 土田麦僊

（絵葉書裏 The Peak Hongkong）

出帆の際はわざわざ御見送り下されありがたく御礼申上げ門司を出ると少しばかり波によりましたがそれも三十分斗りで元気を回復 ずっと平穩の航海をつづけて八日上海に入港しました。

上海は二泊其間に蘇州に参り有名な寒山寺に参り月落烏鳴の旧蹟を見ました。実にいい処でも一度来なくてはいいけません。それから十日上海出帆 今十三日朝五時香港に入港 山上を支那人の駕にのつて練の有様は新しい五十三次です。

麦僊は上海に寄港した際、幾枚かのスケッチ（註二）を残している。何隻もの舟（サンパン）を描いた一枚には「十月八日午前 上海にて」との記載があり、午前に到着したことがわかる。また、川に沿って建てられた家を描いた一枚には「八日午後 竜甫にて麦」と書かれている。上海では中国娘（支那歌妓）に興をそそれたらしく同じ画帳に「時鴻」「楽第」と書かれた素描も書き残している。

十月九日、上海から汽車で二時間かけ蘇州城外の停車場に着き、「寒山寺」「留園」などを訪れ夕方五時の汽車で戻っている。香港ではケールブルカーでピークの上に上り、午後には自動車で香港一周を行った。

「野村一志あて書簡」「大阪時事新報社編『欧洲芸術巡礼紀行』（註三）」「絵葉書」やスケッチによると、コロンボまでの行程は次のとおりである。（註四）

十月 三日、汽車で京都出発。



① 1921・10・25 香港



関真次郎あて葉書

十月 四日、午前十一時郵船賀茂丸にて出帆。

十月 八日、午前六時上海入港。午後竜甫を散策。夜には、支那歌妓置屋にいく。

十月 九日、午前に蘇州着。寒山寺などを訪ね、午後賀茂丸に帰る。

十月 十日、午前八時。上海出帆。

十月 十三日、香港に朝五時に入港。

十月 十九日、シンガポール

シンガポール（新嘉坡）には、午後三時過ぎに町の西端に接岸し翌二十日の夕方に出帆した。一泊する間に自動車を使い、現地人の集落や植物園に行っているが、麦僊は小舟や荷車を引く牛、現地人などをスケッチしている。

十月 二十一日、マラッカ（馬拉加）には未明に到着、出帆までのわずかな時間に上陸し、麦僊は船着場の風景をスケッチしている。

十月 二十一日、ペナンに午後到着。

馬車で支那寺院の極楽寺を見学。

十月 二十二日、ペナンを午前四時に出帆。

十月 二十七日、コロンボ（古倫母）に夕方到着。

上陸しホテルに宿泊、翌日自動車で市中を見学。

十月 二十八日、コロンボを午後二時に出帆。

② MARSEILLE—GARE 1921・11・17

日本新潟懸加茂町 関真次郎様

十一月十二日

一行はまことに元氣□□十一月九日にスエズに着きました。コロンボを出て十三昼夜目です。それから船がスエズの運河を通る間にカイロを見てまわる事にしました。十一時に立つと其夕方五時にカイロに着きます。それからラクダでピラミッドの立つて居る丘を上ります。丁度月夜だったので

（絵葉書裏 ラクダ四匹）

ピラミッドが星の輝く空に浮き上って居るし□□スピックスが月の光に半面白く照らされて居ます。生れて初めての深い感動でした。（以下インクが滲んでいるため不明）

同日麦僊は野村一志氏宛てに葉書を出しており、京都から欧州に向かった一行が総勢二十五人と書いています。スエズ（蘇士）に着いた一行は、翌日に船が出帆するまでの時間を利用してカイロ見学を行った。カイロまで汽車で六時間の行程で夕方五時に到着し、そこから自動車でピラミッドの近くまで行き、後はラクダに乗って見学をし、現地のホテルに宿泊して早朝ポートサイドに戻っている。

③ PARIS 1921・11・27

大日本新潟懸加茂町 関真次郎様

Hotel Bisson 37 Quai des Grands Augustins Paris France

土田麦仙拝

大変御無沙汰致しました。フランスへは十六日に無事着それから途中アビニオン、リオンと博物館を見物しつつ十八日朝十時□□て□□ねて憧憬の地巴里に着きました。そうしてこのホテルに落付き質素な留学生と同様な生活をして居ます。物価などは日本と殆ど同様で□□月六七十円食費（外出して食べるのです）月百五十円もあればやれます。毎日博物館を廻つてとても人間業ではないと思ふ名画に驚嘆して居ます。

（絵葉書裏 AVIGNON）

□□するといふ事は□□ての想像する以上の効果があると思います。毎日疲れ切るのでつい手紙も書けず失礼しておりました。こちらは随分寒く京都あたりよりは寒いけれどやっと□□頃では慣れて来ました。来月二十日頃には以太利に行くかも知れません。



② 1921・11・17 スエズ

③ 1921・11・27 パリ

『歐洲巡礼紀行』によれば、麦僊一行がパリで最初に行李を開いたのは、グラン ザオギュスタン河岸の三十七番地にあるホテルビッソンであった。ホテルはセーヌ川の左岸沿いに位置し、上に聖ミツゼル、下にボン ヌフの二つの橋があり、近くにはルーブル美術館やリュクサンブル宮殿があった。この葉書もホテルから出されたものである。

麦僊はこの葉書を関氏に出したときには、すでにルノワールの作品を一点購入している。十一月十八日にパリに着き、二十五日パリから千代夫人にあてた手紙にはすでに作品を蒐集したことが書かれており、麦僊の行動の素早さには驚かされる。このとき、ピサロの作品にも興味を示しており、セザンヌ、ゴッホ、マイヨールの名前も同時に書き挙げられ、絵を購入するため千代夫人に五千元のお金を至急送るように指示している。

④ PARIS 1922・1・1

日本新潟懸加茂町 関真次郎様

a Paris 土田麦仙拝

今晩は大晦日の晩です。□御国では御多忙を極めて居られる事です。□葉書が御手元に入る頃は昨年御厄介になってあの雪の庭に立って写真を撮って貰った頃と思います。いろいろ御□様にあった□□□といふ事は実に想像のつかない程有益の□□□といふ事をしみじみ感じ□□。ルーブルといふ博物館一つ見るだけでも一週間で見つくせません。

これだけ見□帰つても充分だといふ気がします。それに□□伊太利英国スペイン等を見られるかと思ふと胸のおどる気がします。自分はここに非常な興奮と歓びを以って申し

(葉書裏)

上げなければならぬ事は自分に知られて居る名画を手に入れる事が出来た事です。それはパイプを喰へた男の首像でクルベの画です。それは近代の画家に最も影響を與へた十九世紀最大の

画家でありまた自分の手に入れた

⑤ PARIS 1922・1・1

日本新潟懸加茂町 関真次郎様

三一日 土田麦仙拝

(第二)ものは世界の画家に知られたものです。それがふと画商の手にある事が知れたので思い切つて六千円を投じて手に入れました。これは日本美術界の驚異です。其外素晴らしいものを三四点手に入れました。処日本人には一切いつて□□□にあります。帰る迄にあまり評判になる事を恐れたからです。昨秋手に入れたオデロンドンといふ人の画などは一晩自分は眠る事が出来ないほどの喜びでした。これなどはすきな音楽を聞かされた時同様の感じを持つ画です。兎に角こうした画が手に入るといふ事はこの(フラン)が仏国の金が安く日本の金が比較的高い為です。もし景気が一□戦前と同様になつたらとても自分などに画は買へるものではありません。それでも画の高いのには驚きます。尤も自分の買ったものは皆世界的な画家のものばかりです。どうしても二十円より下のものはありません。自分は三食を梳つてもそれ程の名画を手に入れて居ります。

麦僊は『ヨーロッパからの書簡』によれば、十二月六日に千代にあてた手紙の中で「それで自分はどうしてもこの内のクルベーのパイプを喰へた男とロートレクの赤いキノノの女とセザンヌの二万五千フランの静物の中のどれかを買ひたいと思う」と述べ、さらに一万円を送ってくれるように頼んでいるが、関氏への手紙でクルーベの作品を六千円で購入したことがわかる。麦僊はこの後、ゴッホ、セザンヌ、ルソー、ルノワール、シャバンヌ、ドミエ、ルドンなどの作品を立て続けに購入している。帰国するまでに一部は他の作品と交換したりしているが、日本に持ち帰り帰国後京都の画室において展覧会(註五)を開催している。特筆することは、麦

④ 1922・1・1 パリ



⑤ 1922・1・1 パリ



僊は収集した作品すべて麦僊個人のお金と、審美眼で収集したものである。

⑥ NAPOLI 1922・1・17

日本新潟懸加茂町 関真次郎様

ロウマにて 土田麦僊様

九日に巴里を立つて其翌日は南フランスのニースといふ処に参りました。ここから一寸電車でカアユスといふ処迄参りルノワールの旧宅を見る事が出来ました。ここには澤山のルノワールの画があつたので嬉しく思いました。その処から伊太利に入りピサといふ処ではカンポサントの壁画を見て実に驚嘆して了ひました。実に美しさの極みです。全く我々日本画家の研究しなければならぬものが澤山あります。それから昨十四日の夜□□□に着く事が出来ました。(以下不明)ナポリに向います。

(葉書裏)

実際、こうした名画を見る事が出来るのは実に幸福な事だと思つて居ます。

一月十五日拝

麦僊は大正十一年一月九日にパリを出発し、イタリアに向つた。千代夫人あての一月五日の手紙には一ヶ月位イタリアを旅行し、パリに帰つて半月したらスペインに十日あまり行つてきてその後英国に旅行する予定であると書いてある。

イタリアでの一行は、ゼノア、ピサ、ローマ、バチカン、ナポリ、ボンペイ、アッシジ、フィレンツェ、ボロニア、ベニス、パトヴァ、ミランを見て回り、二月九日に汽車でパリに向けて出発し十一日の午前十時にパリについた。麦僊は当初のホテルにそのまま滞在しており、荷物類もそのままであつた。一ヶ月の旅行であつたがこのときの詳しい内容については黒田重太郎が書いた『欧州藝術巡礼紀行』に掲載されている。一行は旅行する事前に、イタリア各地

の寺院などに何が残されているか情報を集め、かなりの下準備を行つていたものと思われ、精力的に絵画を見て回っている。

⑦ 切手が剥がされており、消印は不明
(1922・2・4)

新潟懸加茂町 関真次郎様

ベニス 土田拝

拝啓 昨二月三日フロレンスからこのベニスに着きました。停車場を下りると直に赤帽がゴンドラに荷物を下ろすといふ不思議な町です。ここでは予期しないいい画がそれ程澤山見られませんでした。明日バドヴァに行きます。ここには素晴らしい画がありますから。

(絵葉書裏)

VENEZIA-Palazzo Ducale-Ponte dei Sospiri)

⑧ PARIS 1922・2・27

日本新潟懸加茂町 関真次郎様

二月二十五日 パリにて 土田麦仙

伊太利からは二月の九日に皈つて(註六)参りました。早速手紙を書きたいと思つて居つた巴里に飯ると何かと見るものが多いのでつい疲れて何にも書けませんでした。巴里もやつとこの頃は灰色の空から春らしい太陽が時々もれて来る様になりました。今日も近來稀な暖かな日□□だったので友達と巴里から少しはなれた郊外のムーードンの丘に参りました。ここには昨年死んだ彫刻界の巨人ロダンの家や工房が其まゝあります。一般には見せないのですが無理に頼んで故人が日常愛して居た澤山の参考品や又作りかけの数知れない彫刻を見て□□感心しました。それから先日自分

(絵葉書裏 Milano-Il Duomo)

ヴィンセント バンゴーク(註七)の大変ないい画を自分の手に

⑥ 1922・1・17 ローマ



⑦ 1922・2・4 ベニス



⑧ 1922・2・27 パリ



入れた事を自分ばかりでなく日本美術界のいい収穫の一つだと信じて居ます。バンゴークの画は巴里の画商でも殆ど見る事は出来ないといつていい位居です。自分はあらゆる画商に頼むでここに一枚出来のいいものを手に入れて嬉しくてたまりません。もう一枚も欲しいと思つて捜して居ます。このバンゴークはホント天才ともいつていい人で最後に自殺したのですが其時友人であつたガッセルという人の家にわずかに十枚ばかり残つて居たのです。この人のものを見てみな感心して帰るのです。其□かなり自分の惹かれたものはいいいものですからいづれ日本に販つたら公開して貰はふと思つて居ます。

二月十一日にパリに戻つた麦僊であつたが、十八日付け(実際には十七日に書いたもの)で千代夫人にあてた手紙の中でゴッホの作品を購入したことを書いています。手紙の中で麦僊は「昨夜はバンゴークを買へた嬉しさで眠れなかつた。いい画を買つた時はいつとも眠れない」と書き記している。ゴッホの作品と同時にシャバンヌの素描、ドーミエの素描、ルドンの油絵、写楽の画なども購入している。また、三月五日付けの千代夫人あての手紙では、アンリー・ルソーの作品を購入したことが記されているが、この作品は現在ブリヂストン美術館の所蔵となつており、日本にあるルソーの作品では代表的な作品である。

麦僊は一九二三年三月二十一日にパリをたち日本に帰国したのであるが、千代夫人にあてた同じ手紙の中で、一九二二年九月二十四日にマルセーユ出帆する箱崎丸に乗つて、神戸には十一月二日に到着する予定を連絡している。また、「自分としての新しい手法が発見されれば或いは少しのばして来春にするかも知れない」とも書いており、実際には三月に帰国している。

⑨ 切手が剥がされており、消印不明

(1922・4・1)

日本新潟懸加茂町 関真次郎様

B.Tsuchida

スペインからは三月の十七日(註八)に販りました。そして二十七日からこのロンドンに参りました。今度は小野君と二人だけです。しかし小野君は二三日の中に巴里に寄つて四月九日の船で日本に販ります。それでも自分はこのロンドンに自分一人だけ残る事になります。明日の晩は小野君と二人だけ送別の日本飯を食はうかなどいつて居ります。自分はしばらく

(絵葉書裏 LONDON—Black (trans Bridge-11)

こちらに居たいと思つて居ます。あまり高いので近かく巴里に販りたいと思つて居ます。そしてどこか巴里の田舎にでも行つて花の咲く郊外を写生し□と思つて居ます。四月一日

スペイン旅行は『欧洲藝術巡礼紀行』によると、土田麦僊、小野竹喬、野長瀬晩花、黒田重太郎の四人で旅している。三月十四日、オルセー駅から汽車で出発し、マドリッド、エスコリアル、トレドの三箇所を見て回り、パリには三月二十二日に戻つたと思われる。小野竹喬が、四月に日本に帰る前にロンドンを見て回る予定となつていたので、駆け足での旅行であつた。

⑩ (AMSTERDAM 1922・11・2) 絵葉書裏面

新潟懸加茂町 関真次郎様 (絵葉書表面)

1・Novembre Monsieur B.Tsuchida

欠損 □ からオランダに参りました。そしてアムステルダムからこの海の中にあるマルケンという島に今日は行つて来ました。これは□□からの雨風が残つて居る実に陰湿な土地なのです。少し寒くて□にしオランダは物価がとても高くてやり切れませ



⑩ 1922・11・2 アムステルダム



⑨ 1922・4・1 ロンドン



ん。早くパリに引き上げねばなりません。

オランダ旅行はパリを十月十二日に出発し、十三日にベルリン着、十九日に出発し、当日ミュンヘン着。二十三日ミュンヘン発、二十四日ドレスデン着。二十七日頃ベルリン着、十月三十日頃アムステルダム着。三十一日頃マルケン。十一月一日アムステルダム。三日ハーグ、アントワープ。四日ゲント。五日ブリュッセルに滞在し十一月七日パリに戻っている。ドイツ、オランダでは、美術館・博物館を精力的に見学し、デューラー、ゴヤ、ボッテチェリ、セザンヌ、ルノワール、ゴッホ、コロ、クールベ、ドーミエ、ゴーギャン、マネ、マイヨール、レンブラントなどの作品に感銘を受けている。

⑪ 西陣 昭和四年十一月十二日
越後加茂町 関真次郎様

土田麦僊

明年には岩崎家から献上の六曲一双に着手するので帝展には出品出来ないとおもいます。

しかしその次ぎにはもつと素晴らしいものを描きます。

(絵葉書裏 帝国美術院第十回美術展覧会出品 罌粟 土田麦僊筆)

⑫ 西陣 昭和四年十一月十二日
越後加茂町 関真次郎様

出品の原色版が出来て来たのでお目にかけます。かたちよく出来て居ます。

土田麦僊

(絵葉書裏 帝国美術院第十回美術展覧会出品 罌粟 土田麦僊筆)

⑬ 西陣 昭和5年 消印薄れており不明
越後国加茂町 関真次郎様

土田麦僊

拝啓 其後は御無沙汰拙作帝展出品ハガキをお目にかけます。幸いにも非常の好評を得今年も亦福田君の鯉と美術院候補となり共に心中 別紙批評の一部をお目にかけます。其外清方氏の報知評、竜子氏の時事新報共に拙作を第一に推賞してくれました。

(絵葉書裏 帝国美術院第十一回美術展覧会出品 明粧 土田麦僊筆)

前年には帝展に出品できないかもしれないと葉書に書いているが、《明粧》を出品し、好評を博した。ほぼ同文の葉書は、野村一志氏にも十一月二日付けで出しており、ほぼ同時期に出したものと推測される。清方氏は「鑄木清方」、竜子氏は「川端龍子」である。

⑭ 西陣 昭和 年 月十五日(推定昭和十年六月十五日)(註九)
新潟懸越後加茂町 関真次郎様 御内

京都市衣笠 土田麦僊

時候儀御一同様にも御機嫌よろしく何よりと存じ上げ□□候。ご存じの如く□くとも帝展問題にて東上致し居り候。節句のちまき御送り下され子供達は大よろこびにて頂戴致し有難御厚情厚く御禮申上候尚皆様方に御身大切に願ひ上候。

(絵葉書裏 東西大家新作小品画展覧会 (鮮魚) 竹内栖鳳先生)

四、終わりに

関真次郎氏あての葉書十四葉について紹介してきたが、最初に記したように書簡がこの他五十五通ある。野村一志氏までの数はないが、関氏も麦僊が作品制作を行う上で、青年期から晩年に至る

⑪ 1929・11・12 京都



⑫ 1929・11・12 京都



⑬ 1930・11 京都



まで支えてきた後援者(パトロン)の一人であったことには間違いない。

麦僊がヨーロッパ滞在中に収集した西洋絵画コレクションについては、拙稿「大原孫三郎と土田麦僊の西洋絵画コレクション」(註十)の中で紹介しているので、参考にしていただきたい。

関真次郎氏は経営不振に陥り、昭和九年新潟市で所蔵品を入札にかけた。そのときの目録が残されているので、所蔵していた麦僊と竹内栖鳳の作品を最後に紹介したい。

「昭和九年四月二十一日、二十二日両日下見 二十三日 入札競売
加茂町 関家蔵品入札 会場 新潟市西堀通二番町 超願寺」

土田麦僊作品

- ①《百日紅》 絹本共箱 ②《椿》 共箱 ③《岳上観音》 絹本共箱 ④《富岳》 絹本横物共箱 ⑤《小帖》 ⑥《静物額》(蔬菜) ⑦《双児横物》 共箱 ⑧《春魚横物》 絹本共箱 ⑨《ツツジニ貼捲り》 ⑩《農夫扇面》 ⑪《金魚三枚張込二枚折屏風》 ⑫《海女之図六尺六曲》 一双 ⑬《椿画香合》 共箱 ⑭《画一枝生》 ⑮《椿絵抹茶碗》 一ヶ

麦僊の作品はそれほど多く見られない。特筆するのは《海女》の六曲一双(現在、京都国立近代美術館所蔵)、《静物額》(現在は《蔬菜》で知られる)二点くらいである。また、関真次郎氏にあてた書簡の中に、大正十年岡墨光堂の火事により消失した《冬》を譲る予定でいたことがわかる記載がある。おそらく、欧州旅行の滞在費の一部にするためであったものと考えられる。関氏が麦僊の作品よりも多く所蔵していたのは、竹内栖鳳の作品である。栖鳳の作品は麦僊の斡旋によつて購入したものもあると思われる、その数は麦僊よりはるかに多く所有しているが、麦僊のように代表作となるものは見当たらない。

竹内栖鳳作品

- ①《涼蔭》 絹本共箱 ②《山村秋晴》 絹本共箱 ③《伊勢物語》 絹本共箱 ④《秋叢遊狸》(神戸光村氏旧蔵) 絹本共箱 ⑤《水墨山水》 横物共箱 ⑥《雀》 共箱 ⑦《竹二雀》 半切共箱 ⑧《鶴鴛》 絹本共箱 ⑨《薰風》 共箱 ⑩《鷺》 ⑪《柳村晚霽》 共箱 ⑫《瓜二蟲》 ⑬《秋山食禄》 共箱 ⑭《群羊》 絹本共箱 ⑮《若松》 共箱 ⑯《青緑山水》(神戸光村氏旧蔵) 絹本共箱 ⑰《落栗》 共箱 ⑱《林檎》 横物共箱 ⑲《湧遊所見》 ⑳《猿猴捲り》 ㉑《梅捲り》 ㉒《慈姑捲り》 ㉓《富士扇面額》 ㉔《扇面張二枚折屏風》 ㉕《書簡横物》 ㉖《团扇句佛賛》 ㉗《千子捲り》 ㉘《ホーヅキ捲り》 ㉙《慈姑捲り》 ㉚《榴荷色紙》 ㉛《印譜帖》 ㉜《扇面張二枚折屏風》 ㉝《富士四方盆》 ㉞《画盆》

(註一)「土田麦僊」は和綴じの体裁の本で、全冊廃棄処分されたことになっている。内容は、「諸家感想」「麦僊書翰」「土田麦僊先生年譜」で構成されており、「諸家感想」は大原孫三郎、小野竹喬、黒田重太郎、田中善之助、小松均、吹田草牧などの文章が掲載されている。「麦僊書翰」は、「仮面会時代まで」「島の女より春禽趁晴図まで」「国展初期」「渡欧時代」「国展後期」「帝展時代」「書翰草稿」の七部門に別れている。八十五通の書簡のうち野村一志氏あてが四十四通含まれ、ほかに志和舜雅、村上華岳、千代夫人、土田杏村、坂崎担、池田虹影などにあてたものが掲載されている。

『土田麦僊』が廃棄処分された理由はあきらかでないが、「書翰草稿」のなかに帝展改組に発した問題について、麦僊が感情を吐露した文節があり、これが原因の一つではないかと推測される。

(註二)欧州旅行の途中、上海で描かれたスケッチをはじめ、中国風景、中国・インド風景、ヨーロッパを描いた画帳を新潟県立近代美術館・万代島美術館が所蔵している。その他シंगा

⑭ 差出年不明 京都



ポール風景、西洋婦人「時鴻」^(註一)、楽第^(註二)「巴里の女」などのスケッチも所蔵しており、写真やデータは平成五年発行の『新潟県立近代美術館所蔵品目録』に掲載されている。

は『欧洲藝術巡礼紀行』に詳しい。

(註九) 竹内栖鳳の『鮮魚』は、昭和十年六月に三越で開催された「東西大家新作小品画展覧会」に出品されている。葉書に記されている「節句のちまき」の内容からも、同時期と推定されるため昭和十年六月に比定した。このとき関氏は前年の「藏品入札」により、麦僊の作品を手放している。

(註三) 国画創作協会同人・大阪時事新報社編集『欧洲藝術巡礼紀行』十字館 大正十二年九月五日 「欧州」の漢字については、「欧洲」を使用している。『欧洲藝術巡礼紀行』を実際執筆したのは黒田重太郎である。日本を離れてからヨーロッパに着くまでの旅行記、ヨーロッパに着いてからイタリア旅行を行い、麦僊、小野竹喬、野長瀬晩花、黒田重太郎の四人でスペイン旅行を行ったところまでを記述している。

(註四) 麦僊の欧州旅程については、金井徳子氏の『土田麦僊のイタリア通信』の中で「土田麦僊の欧州旅程一覧」として詳しく紹介されている。

柏木加代子氏が『かきつばた 土田麦僊の愛と芸術』の中において「麦僊の欧州旅程一覧」として掲載しているものと、金井氏の欧州旅程一覧と、関氏あての葉書により判明した部分で補い、詳細な旅程とした。

(新潟県立万代島美術館館長)

(註五) 麦僊はヨーロッパ滞在から帰国の途につき、五月一日神戸に着いた。帰るまもなく五月十九日から四日間、ヨーロッパ滞在の成果として洛西衣笠園内にある麦僊の画室で、西洋絵画の展覧会を行った。

(註六) 「販る」は「帰る」である。

(註七) 「ヴィンセント バンゴーク」は「ヴィンセント ヴァンゴッホ」のことである。

(註八) 麦僊の書き間違いと思われる。詳しい旅程ならびに見学先

(註十) 横山秀樹「大原孫三郎と土田麦僊の西洋絵画コレクション」『大原美術館展』図録 新潟県立万代島美術館 平成十七年九月